In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	双子・三つ子における発育・発達支援モデルを組み込んだ多胎育児支援プログラムの開発
Author	横山 美江, 杉本 昌子
Citation	大阪市立大学看護学雑誌, 7 巻, p.75-78.
Issue Date	2011-03
ISSN	1349-953X
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院看護学研究科
Description	平成 22 年度看護学研究科大阪市立大学重点研究 / 平成 22 年度看護学研究科大阪市立大学重点研究報告書「看護実践へのトランスレーション・リサーチ拠点」
DOI	10.24544/ocu.20180403-087

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

双子・三つ子における発育・発達支援モデルを組み込んだ多胎育児支援プログラムの開発

横山　美江，　杉本　昌子
Yoshie Yokoyama　Masako Sugimoto

キーワード：多胎児，出生体重，発育，虐待，プログラム

多胎妊娠は単胎妊娠に比べ母体ならびに児への影響も大きく，出産後も双子の約70％，三つ子の約96％が低出生体重児として生まれている[1-3]。さらに，障がい児の発生率も単胎児に比べ高いなど[4)-6)]，多胎児家庭にはさまざまな問題が生じやすい[7)-21)]。本稿では，多胎児家庭の育児問題を概説し，現在開発中の多胎育児支援プログラムについて報告する。

Ⅰ．多胎児家庭が抱える問題と課題

１）出生体重と出生後の発育

単胎児の出生体重はおよそ3000gであるが，双子の出生体重はおおよそ2300g前後で，三つ子はおよそ1700g前後であり[3)]，多胎児は低体重で小さく生まれる場合が多い。

出生後，双子であれば生後６か月から１歳までに急激に単胎児の体格に追いつき，４歳くらいには差はほとんどなくなることが報告されている[12)]。しかしながら，三つ子では１歳までに単胎児との体格差は小さくなるものの，６歳になっても単胎児との体重差は４％から９％，身長差は２％から５％あることが判明している[13)]。

双子や三つ子の出生後の発育は，単胎児とは異なった点が多いにもかかわらず，これまで双子や三つ子の発育に関する保健指導は，単胎児を主とする一般児の成長曲線を用いて実施されてきた。しかし，双子や三つ子における出生直後の発育は，単胎児と異なる点が多い。このため，双子や三つ子の母親は，児の発育に不安を訴えることが多かった。双子や三つ子の発育に関する保健指導は，双子や三つ子用の成長曲線が作成されており，それらを用いて指導することが望ましい[11)-14)]。また，妊娠中から双子や三つ子の出生体重の目安や出産後の発育状況に関する情報を多胎児の親になる人に伝えておくことも，出産後の育児不安を軽減するために重要である。

２）母乳育児の困難さ

多胎児は，前述したように低体重で小さく生まれることが多い。このため，吸啜力が弱く，母乳の飲みも悪い。このような状況から，母親に育てにくい子として認識されやすい。

実際に，筆者と長年にわたって共同研究を実施している西宮市の４か月健診のデータを分析すると，単胎児と多胎児間で授乳状況に差が認められ，単胎児では４か月健診時で人工栄養のみによる授乳が25.0％であったのに対し，双子や三つ子では人工栄養のみによる授乳が52.5％と，双子ならびに三つ子で人工栄養のみによる授乳が有意に多くなっていた[15)]。

多胎児家庭では，低体重児が複数いることで，母親の育児負担は授乳を含めて技術的にも，時間的にも非常に困難なものとなる。多胎妊娠が判明した場合には，妊娠中から同時授乳法などについて指導することが望まれる。

３）育児情報の不足と育児不安

妊娠や育児に関する情報の取得状況については，単胎児の母親では14.1％が取得できなかったと回答していたのに対し，多胎児の母親では55.2％が取得できなかったと答え，多胎児の母親では妊娠や育児に関する適切な情報が取得できない者の比率が単胎児の母親に比べ有意に高い[18)]。さらに，多胎児の母親は，単胎児の母親に比べ，より強い育児不安を感じている者が多いことも判明している[20)]。このように，多胎児を抱える母親は，育児情報の不足により，強い育児不安を感じている母親も少なくない。

大阪市立大学大学院看護学研究科

4）多胎児と児童虐待

多胎児は，単胎児よりも被虐待児になる危険が高く，多胎児は児童虐待のハイリスクグループとして位置づけられてきた[20]。わが国における双子の虐待では，双子双方に対する虐待よりもむしろ双子のどちらか一方の子どものみを虐待する場合が大半を占め，しかもその加害者は実母がほとんどである[20]。さらに，これらの一方虐待家庭では親の極端な愛情の偏りが共通して存在していることが指摘されており[18]，親の極端な愛情の偏り，すなわち偏愛は一方の子どもへの虐待へと発展する危険性を秘めている。ここで留意すべきことは，双子や三つ子の多くの母親は，どの子どもにも同じように接したいと思っていることである。しかしながら，多胎児育児では物理的にも，時間的にもどの子どもにも同じように接することはほとんどの場合不可能である。ただ，偏愛が極端になった場合には，注意が必要となる。

2009年に名古屋地裁で判決が下された双子の虐待事件では，極度の睡眠不足と疲労によりもうろう状態に陥った母親が，双子の泣き声で処理できないほどのイライラに襲われ，一方の子どもを持ち上げ，気づいた時には，子どもが脳挫傷により死亡していた。この事件では，双子の一方の子どもが低出生体重児として生まれ，出生後の発育も不良であったため，母親は子どもの発育に不安を感じ，保健師に不安を訴え，相談していた。しかし，保健師からは適切なアドバイスや支援がもらえず，不安をさらに募らせていたことが報告されている。このような事件を２度と起こさないためにも，適切なサポートが望まれる。

Ⅱ．多胎妊娠中における「双子・三つ子のプレパパ・プレママ教室のプログラム」開発

本プログラムは，実際に西宮市ならびに大阪市において実施し，改良を加えたものである。本プログラムの主な目的は，多胎妊婦ならびにその夫に対し，多胎妊娠・育児に関する適切な情報（妊娠中・出産後に生じやすい問題とその対策）を提供し，かつ仲間づくりを支援し，出生後の支援へと繋ぎ，ひいては虐待予防につなげることである。

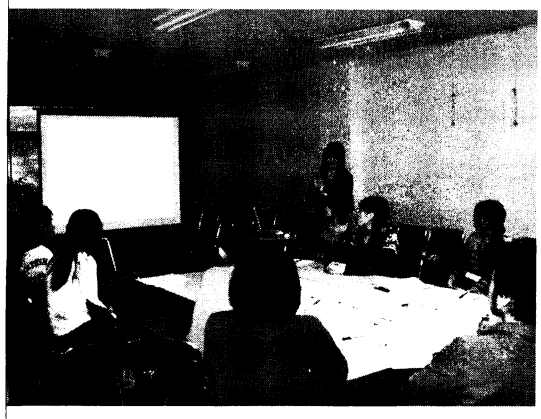
本プログラムは，資料１に示すような内容ですすめている。まず，双子を育てている先輩ママから，双胎妊娠や出産後の双子育児に関する体験談を話してもらっており，これらの体験談を聞くことで参加者は多胎妊娠，出産，多胎児育児について具体的にイメージできるようになる。

担当保健師は，多胎児家庭支援に役立つさまざまな資料を紹介している。特に，これらの資料の中には，こども未来財団で実施している双生児家庭育児支援事業（社会保険適用者対象），ならびに，西宮市ファミリーサポートセンターの情報が含まれている。双生児家庭育児支援事業は，保護者の保育疲れを解消するためにベビーシッター利用を助成する制度である。さらに，地区担当保健師についての情報を含めた保健所ならびに保健福祉センターの情報を説明し，出産後の支援へと繋いでいる。多胎専門家からの話として，単胎妊娠との相違からみた

資料１．「双子・三つ子のプレパパ・プレママ教室」プログラム

自己紹介
１）先輩ママの体験談の紹介
２）保健師からの多胎児家庭に参加者への資料紹介
３）講師からの話（多胎妊娠中の諸注意と多胎児育児）
①分娩週数
②単胎妊娠との相違からみた双胎妊娠・品胎妊娠における母体の身体的変化
③多胎妊娠中の諸注意
④双子・三つ子の出生体重と出産後の発育状況
⑤出産後に直面しやすい育児問題とその対処法
⑥同時授乳法の説明と演習
４）仲間づくり（自己紹介カードの交換）
閉会

資料2．双子・三つ子のプレパパ・プレママ教室



双胎妊娠・品胎妊娠における母体の身体的変化と分娩週数，多胎妊娠中の諸注意について説明し，さらに双子・三つ子の出生体重と出産後の発育状況，出産後に直面しやすい育児問題とその対処法（同時授乳法の演習を含む）等について解説を行っている。本プログラムの効果に関する評価は，今後行う予定である。

引用文献

1）今泉洋子：多胎妊娠の疫学－本邦における多胎児の出産率，周産期死亡率と乳児死亡率の年次推移ならびにこれら死亡率に影響を及ぼす要因－，平成10年度厚生科学研究「子ども家庭総合研究事業」：74-89, 1999

2）Yokoyama Y.: Fundal height as a predictor of early preterm triplet delivery, Twin Research 5: 71-74, 2002

3）Kato N.: Reference birthweight range for multiple birth neonates in Japan, BMC Pregnancy Childbirth 4: 2, 2004

4）横山美江，他：双子，三つ子における障害児の発生状況，日本衛生学雑誌 49: 1013-1018, 1995

5）Yokoyama Y, et al.; Prevalence of cerebral palsy in twins, triplets and quadruplets, International Journal of Epidemiology 24: 943-948, 1995

6）Yokoyama Y, et al.: Incidence of handicaps in multiple births and associated factors, Acta Genet Med Gemellol 44: 81-91, 1995

7）横山美江：単胎児家庭の比較からみた双子家庭における育児問題の分析，日本公衆衛生雑誌　49: 229-235, 2002

8）横山美江，他：双胎，品胎家庭における育児に関する問題と母親の疲労状態，日本公衆衛生雑誌　42: 187-93, 1995

9）横山美江，他：多胎児をもつ母親の心身の疲労と育児協力状況，日本公衆衛生雑誌 44: 81-8, 1997

10）横山美江編：地域看護研究,医歯薬出版，東京，2010

11）横山美江編：双子・三つ子・四つ子・五つ子のための母子保健と育児指導のてびき，医歯薬出版，東京，2003

12）Ooki, S., et al.. (2004). Physical growth carts from birth to six years of age in Japanese twins. J Epidemol, 14, 151-160.

13）Yokoyama Y., et al. (2008): Weight Growth Charts from Birth to 6 Years of Age in Japanese Triplets, Twin Research and Human Genetics, 11, 641-647.

14）横山美江：国際比較研究から分析する双子・三つ子の発育・発達支援モデルの開発　大阪市立大学看護学雑誌，2010.

15）Yokoyama Y, et. Al. (2006): Breastfeeding Rates Among Singletons,Twins and Triplets in Japan: A Population-Based Study, Twin Research and Human Genetics, 9, 298-302.

16）Petterson B., et al.: Twins, triplets, and cerebral palsy in births in Western Australia in the 1980s, BMJ 307: 1239-1243, 1993

17）横山美江，他：障害児をかかえる双子家庭の育児環

境と母親の疲労状態，小児保健研究 46: 603-609, 1999
18）横山美江，他：多胎児をもつ母親のニーズに関する調査研究，日本公衆衛生雑誌　51: 94-102, 2004
19）杉本昌子，他（2008）：多胎児をもつ母親の不安状態と関連要因についての検討－単胎児の母親との比較分析から－，日本公衆衛生雑誌，55, 213-220.
20）Tanimura M., et al.: Child abuse in one of a pair of twin in Japan, Lancet 336: 1298-9, 1990
21）横山美江，他：多胎児に対する母親の愛着感情の偏りと関連要因の分析，日本公衆衛生雑誌　48: 85-94, 2001